

長崎は今日も雨だった

粕屋郡粕屋町 木戸 善一

久し振りの故郷長崎への帰郷である。

空は曇りで小雨が時々降っていた。名物『長崎チャンポン』で昼食をすませ、懐かしい生れ故郷の港町福田本町へ墓参した。久し振りに見る故郷の自然と幼な友達との出会いは幼い頃を思い出し、大変懐かしい限りであった。想えば被爆（三菱重工長崎造船所内）してから今年で50周年になるが、当時はまだ17歳の学生であった。

被爆前に私はまず油脂焼夷弾に夜半攻撃された。その焼夷弾は遠く、稲佐山方面にユラユラと油脂が燃えながら無数に落下していくのを見たが、何時自分達の家にも落下してくるかと思った。私にとっては最初の空爆体験ただだけに、暗い防空壕の中で恐怖のため夜通し一睡もできない一夜を過ごした。

次は忘れもしない昭和20年8月1日の三菱重工長崎造船所の爆弾攻撃である。その当時、当造船所内では特殊潜航艇や、『マルヨン』の記号と呼ばれ小型木造船の舳先に爆薬を積んで敵艦に体当たりする特攻艇等が私の実習場近くで秘造されていた。敵機の攻撃目標は主にこの秘造所かと思ったが、中には地下防空壕にも爆弾が落下し、何十人もの人が生埋めとなり全員が死亡した。その時私が避難した防空壕のすぐ側にも爆弾が落下したが、奇跡的にも私は助かった。敵機を射つ高射砲の音と爆撃機の飛行音や爆弾の炸裂等が入り交じって、とても生きた心地はしなかった。空襲警報解除後外に出て見ると、防空壕入口附近には大きな穴があき、その附近には主に軍人達のバラバラになった死体が散乱していた。

8月1日の爆弾攻撃後、次の降伏宣伝ビラが敵機から散り蒔かれたと友人より聞かされた。『8月8日長崎に新型爆弾を投下する（私の見たビラには投下日は書かれていなかった）。この爆弾の威力は爆撃機B29の2000機に搭載した爆弾に匹敵する。もし嘘と思うなら広島を見よ。市民はただちに退避せよ』という内容のビラかと記憶している。しかし8月8日には何事もなかったのやはりデマの宣伝ビラかと私は思った。

ところが、“ピカ・ドン”。8月9日午前11時2分（私は偶然にも腕時計を見ていた。午前11時1分だった）、私はその“ピカッ”を工場の実習場から約100m前方に判然と見た。稲妻が塊まったような物凄い光と、一瞬熱気を含んだ突風が襲ってきた。『地球に何か異変でも起こったのでは？』と一瞬思った。『伏せろ！』と大声で叫んだところまでは覚えてはいたが、後は意識不明となり、“ドン”の音は全く聞こえなかった。…数秒後防空壕に避難する人達のガラスを足でバリバリと踏み割る音で私の意識は回復した。

ああまた助かった。これで3度目である。

防空壕の中には約200～300人いたかと思うが、火傷や打撲、流血者等で防空壕の中は大騒ぎとなった。それから…約6時間後、恐る怖る外に出て見ると長崎港の向岸（長崎駅～県

庁附近) 一帯は火の海と化し、黒煙が濛々と空に舞い上っていた。そして空にはあの茸型の原子雲がぼっかりと浮かんでいた。

帰宅途中雨がパラパラと降ってはきたが、その雨の色が白色か黒色かはよく覚えていない(黒色で放射能を含んだ原子雨と後日聞いてまた怯えた)。

原爆投下約2～3日後、私は学友の生存確認調査にまず各市内病院数ヶ所を廻った。院内の待合室や廊下は、どこの病院でも病人と死体で思うように歩けなかった。無傷の人でも、頭髪が抜け、下痢症になった人は殆ど翌日には死亡していた。その原因が放射能であることが後日判明し、無傷で元気な被爆者でも明日は我身かと毎日戦々恐々としていた。

病院の調査は途中で中止し、次は爆心地附近で死亡した学友の死体処理であった。原爆投下約1週間後と思うが、稲佐橋で雨と稲妻と雷にあい、またもや“ピカ・ドン”かと思ひ水溜りの路上に伏した(その後この稲妻恐怖心は5年間続いたように思う)。ずぶ濡れになった洋服のまま私は稲佐橋を渡り、三菱造船幸町工場附近に来た時、偶然にも学友山下君の死体に遭遇しびっくりした。死体は無傷で死因は不明であった。人名確認のため再度名札を見たところ、胸元からロザリオが見えた。彼は無口でいつも寂しそうな顔をして教室の隅に座っていて友人も殆どいなかったが、何故か私とは親しかった。友人山下君の死体をそのままにして、私は次の目的地に急いだが何故か涙も出ず、また悲しみも込み上がってこなかった自分が不思議でならなかった。

一面瓦礫の原と化した爆心地附近一帯には黒焦げの死骸がいたる所に転がり、また丸焼けのため人名は解らず、私達学友115人は約1週間で300人の死体を火葬した。その中に学徒動員女学生のあまり火傷していない死体が22体あった。その死体の中からやっとのことで我が子を探し出した一人の母親がいた。もうその死体には蛆がたかり腐っていたが、いつまでもその死体を抱きしめ我が子の名前を泣き叫び続けていた母親の姿を今でも時々思い出す。夕暮の一面の焼野原は死体だらけで道もよく解らない。そしてあちこちにはまだ火が燻っていた。その中を焼かれ破れたボロボロの衣服を纏い、それも裸足で我が子の名を叫び続けて探し求めていた半狂人的な母親に何人か出会った。左側にはグラマン戦闘機の機銃掃射をうけ、命からがらに逃げこんだ山王神社の鳥居が片足で立っていた。また浦上川や防火用水溜には水を求めたか、多くの人達が重なりあって死んでいた。

終戦後間もなくして、米船が早々と長崎港に入港してきた。夜になると船上の電灯は煌々と光り輝き、まるで昼間のような明るさだった。またスピーカーからは音楽が流れ、戦勝を祝ってか大勢の水兵達が夜通し踊りまくっていた。その光景をまのあたりに見た私は、『平和』とはこのような光景かとふと思った。戦争に負けたことは非常に悔しかったが、灯火管制やローソク送電で毎晩の暗さと食糧難や空襲の恐怖にさらされる日々がもう限界にきていた。長崎港の埠頭で一夜明かした私は、まずこれからの焼土と化した長崎、そして70年間も生物が生息できないと聞かされた原爆地長崎、いやこれから先の我が人生をどうすべきか等々色々と考えた。夢も希望をも失くした私は、姉の住む北九州の地で人生最初からやり直すべく決意し、被

爆半年後故郷長崎を去った（後日、この北九州地が原爆投下の第一目標地と聞かされ、またもやびっくりした）。

被爆から今年で50年、故郷長崎にはもう被爆の跡形も殆どなく、よくここまで復興したが、被爆者の我々にとっては毎日が原爆病との闘いである。平和になると人命も尊重されるが、戦争時の人命は実に悲惨であり、また哀れである。そして戦争は人間性まで変えてしまう。人間の幸運と不運は紙一重であり、生死をも左右する。恐ろしいことである。今後はいかなる理由があるにせよ戦争は絶対にすべきではない。まして核戦争、もつてのほかである。

後残された我が第二の人生は、常に勇気をもって忍耐強く前向きに挑戦することを座右の銘として、原爆死した人の分まで長生し、人のため、世のため、また世界平和のために尽くすべく、これからも一層頑張らねばと思い、故郷長崎を後にした。

昨日からの小雨は原爆死者を悲しむかのように…、長崎は今日も雨だった…。